

令和二年度 第一回 中学入学試験

国語

試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

注意事項

1. 問題冊子と解答用紙を回収するので、両方に受験番号・氏名を記入すること。
2. この問題冊子は、14 ページあります。
3. 問題冊子や解答用紙によごれや印刷されていないところがあったら、手を挙げて試験監督かんとくを呼ぶこと。
4. 解答はすべて、解答用紙へ記入すること。

受 験 番 号			

氏 名

《一》次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

先生は星座盤ほしざんの使い方を説明した。

初めて使う星座盤は、「こんなので宇宙のことがわかるの?」と訊ききたくなるほど簡単な仕組みだった。まず、割ピンで留めた二重の盤の、上のほうを回して、月日と時刻を決める。それから経度を調整する。「このあたりは東経一四〇度ぐらいですから、一四〇の目盛りに合わせてください」——上の盤にあいた楕円形だえんけいの穴から、星座がいくつも覗のぞく。それが、この街から見上げる星空ということになる。

「試しに、今日の星空を見てみましょう。八月五日の午後八時……やってみて」

日付と時刻を合わせて、経度を調整した。

星空が見えた。北の空に、こぐま座とカシオペア座がある。こぐま座のてっぺんに光っているのが北極星だ。「実際には、街の明かりがあつたり空気が汚よごれていたりして、星座盤にある星をぜんぶ見ることはできません。でも、ほんとうは、今夜の夜八時の空には、これだけたくさんの星が光っているんです。すごいでしょう?」ふうん、と少年は盤を指で押おさえたままうなずいた。

すごいのかどうか、よくわからない。夜に外出することはめつたにないし、そのときはたいがいお父さんの車に乗って出かけるので、夜空を見上げる機会はない。それに理科は苦手だし、星や宇宙に興味はないし……。先生が言う日付と時刻に合わせて星座盤を回すのを、何度か繰くりり返した。

「はい、だいぶ動かし方にも慣れたと思いますので、今後はグループの中で順番に日付と時刻を指定して、星空を探してください」

静かだった会議室は、またにぎやかになった。

少年は、A隣となりを見た。女の子も少年に遠慮りよがちに目をやって、「どっちから言う?」と訊いてきた。想

像していたより細くて、高くて、優しそうな声だった。

「……そっちからでいいよ」

少年の声は緊張でうわずってしまった。

女の子は「あ、そう」と軽く応え、すぐに、まるで最初から決めていたように日付と時刻を口にした。

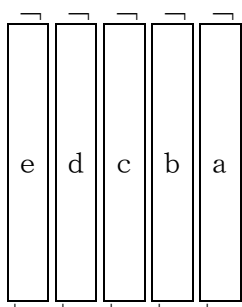
「十二月十九日の夜七時」

胸が、どきん、とした。

「なんで？」——思わず訊くと、女の子は逆に **B** した顔で少年を見て、それからクスツと笑った。

「誕生日。ちょうど七時ぐらいだったって、お母さんが言ってたから」

胸がさらに、どきん、どきん、とつづけて高鳴った。



生まれた時刻はわからない。両親に聞いたことも、あるような、ないような。夜だった——と、思う。夜の七時頃だった——ことにした。

「すごい。偶然だね」

女の子はうれしそうに言った。

少年も「うん、びっくりした、俺も」と笑った。

二人そろって、それぞれの星座盤を回した。夏の夜空とはまったく違う空があらわれた。夏には南北に延び

ていた天の川が、冬には東西に横たわっている。こぐま座も、くるつと逆立ちをしたように、北極星が一番南になった。夏には見えなかったうお座が空の真ん中にある。アンドロメダ座やカシオペア座も、だいぶ南に下がっていた。

「……うわっ」

① さつきはなにも感じなかったのに、いまは、宇宙や星のことを素直にすごいと思った。女の子も、星座盤をじっと見つめて、「わたしたちの誕生日って、こういう空だったんだね」と言った。

「わたしたち」が、いい。同じ日に同じ街で生まれて、ずっと出会うことなく同じ日にちを生きてきた「わたしたち」がいま巡り会えた、というのが、すごく、いい。

胸の高鳴りが、微妙に変わった。最初はただ驚いていただけだったが、いまは違う。② 女の子の名前を訊きたかった。自分の名前も知ってほしかった。胸の高鳴りが大きすぎる。息が苦しい。やっとの思いで声を絞り出した。

「……学校、どこ？」

「港小。そっちは？」

「俺……つつじヶ丘」

「つつじヶ丘って、どこだっけ。駅のこっち側？」

「ううん、逆、駅の西口から山のほうに行ったところ」

「あ、じゃあ、市民会館の近く？」

「ちよつと遠いけど、図書館なら近所」

「図書館とか行ったりするの？」

「たまたま。本は借りないけど、外で遊んでる」

「どんな遊びが流行^{はや}ってるの？」

「ロクムシとか……でも、女子はよくわかんないけど」
そんなこと、どうでもいいのに。

女の子は、それ以上学校のことは訊いてこなかった。「じゃあ、今度はそっちが決めて。日にちとか時間とか」と言つて、誕生日に合わせた星座盤を動かして星空の形を変えてしまった。

少年はがっかりして、頭をはたらかせる余裕もなく、とっさに浮かんだ日付と時刻を口にした。
一月一日午前〇時——。

「やだあ、テキトー」と女の子はおかしそうに笑つて、人差し指で盤を回した。

星座盤の操作をしばらく練習したあと、宇宙のはじまりや星の生まれる仕組みを解説したビデオを観て、みんなプラネタリウムに移動した。

プラネタリウムの席は決められていなかったが、みんな自然とさっきのグループごとに集まって座^{すわ}った。

少年も——先に座った女の子の隣の席に、どきどきしながら腰^{こし}かけた。もしも嫌^{いや}がられたり別の席に移られたりしたらどうしよう、死んじやうかもしれない、死んだほうがいい、もう死んじやおう、と本気で心配していたが、女の子は平気な顔をして、投影^{えい}の始まる前のドーム型の天井^{てんじやう}を見つめたまま、言った。

「わたし……プラネタリウムが一番楽しみだったの。だから一人でも申し込んだの」

少年は、小さな声で、聞こえなくても——聞こえないほうがいいとも思つて、「俺も」と言った。

ブザーが鳴つて、天井が暗くなつた。首を動かさなくても天井を眺^{なが}められるように、椅子がゆつくりと後ろに傾^{かたむ}いていく。女の子は「もうすぐ始まるね」とささやいた。少年も「うん……」と小さく応えた。会議室で隣り合つていたときよりも距離^{きょり}が近い。肘^{ひじ}掛けに載^のせた腕^{うで}が、女の子の腕と触^ふれそうだった。

音楽とともに、星空が天井いっぱい広がった。

「今年の旧暦れきによる七夕は、八月十一日です。皆さんもご存じのように、織姫ひめと彦星ひこが年に一度だけ天の川を渡わたって出会える、という日です。織姫はこと座のベガ、彦星はわし座のアルタイルという名前の星で……」
ナレーションに従したがって、ベガとアルタイルがひとときわ明るく瞬またき、はくちよう座のデネブを合わせて、『夏の大三角形』が描えがき出された。

少年は女の子の様子をそっとうかがった。顔を向けることはできない。声もかけられない。気配だけを感じ取る。

来年の夏休みにも『子ども天文教室』は開かれる。六年生のクラスは、バスで天文台まで出かけて、一泊二日ぼくで天体望遠鏡を使った星空観察をするという。

③ 来年も参加したら、また会えるだろうか。いまのうちに「来年も行く？」と訊いて、「俺は行くけど」と伝えて、約束とまではいなくても、とにかく来年の話をして……そうすれば、ほんとうに、また会えるだろうか……。

片思いの子はいる。同じクラスのタナベさん。比べたらタナベさんのほうがずっとかわいいし、口喧嘩げんかばかりしていても、けっこう気が合うところもあるし、だいいちタナベさんとは毎日同じ教室で会えるのに。

浮気うわって、こういうこと？

俺おれって、オンナたらしの、ヘンタイ？

急に恥はずかしくなった。④ 頬ほや耳みみたぶが熱あつくなった。

まいったな、まいつちやったな、と椅子に座まったまま腰こしをもそもぞさせていたら、肘ひじが、女の子の肘ひじに触れた。思わずびくくつとして、肘掛ひじかけから腕うでを下くだろして、肩かたをきつくすぼめた。

女の子は体を動かさなかった。星空に夢中むちゆうになっているのが気配けいでわかった。そっとな横顔よこがおを盗ぬすみ見ると、天井の星明かりを映し込んだ女の子の目は、涙なみだを浮かべたようにきらきら光あっていた。

投影が終わって椅子の角度が元に戻り、天井の明かりが点くと、女の子は「じゃあね」と少年に一声かけて、さつさと席を立ち、外に出て行った。

お別れの名残惜しさは、少年の胸にだけ、あった。

プラネタリウムのロビーでは、先生が修了証と記念品の特製ステッカーを配っていた。女の子は一人でそれを受け取って、一人で帰っていく。追いかけたかったが、ステッカーをもらう行列は、もうだいぶ長くなっていた。天体望遠鏡の形をしたステッカーは——やっぱり、ほしい。

行列の後ろに並んだ。女の子はロビーから建物の外に出るところだった。

呼び止めて、駆け寄って、足を止めて振り向いた女の子に……想像だけは先へ進んでいくのに、声が出ない。女の子の後ろ姿が、消えた。

少年の胸の高鳴りも、すうっとおさまった。

泣きたいような、あははつと笑ってしまいたいような、胸やおなが、ふわふわしたクッションにそっくり置き換わってしまった気がする。

行列はあと十人ほど。修了証の名前と本人を確認するのに手間取って、なかなか先に進まない。

少年は手に持った星座盤を、そつと指で回した。

十二月十九日、午後七時——。

⑤ ベガとアルタイルは、天の川を挟んで、西の地平線の少し上に浮かんでいた。

(重松清『小学五年生』「プラネタリウム」文藝春秋)

問一、

A

・

B

に入る言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、	<table border="1"><tr><td>A</td></tr></table>	A		そつと		<table border="1"><tr><td>B</td></tr></table>	B		にっこりと
A									
B									
イ、	<table border="1"><tr><td>A</td></tr></table>	A		びくつと		<table border="1"><tr><td>B</td></tr></table>	B		うつとりと
A									
B									
ウ、	<table border="1"><tr><td>A</td></tr></table>	A		ちらりと		<table border="1"><tr><td>B</td></tr></table>	B		きよとんと
A									
B									
エ、	<table border="1"><tr><td>A</td></tr></table>	A		じつと		<table border="1"><tr><td>B</td></tr></table>	B		いらいらと
A									
B									
オ、	<table border="1"><tr><td>A</td></tr></table>	A		くるりと		<table border="1"><tr><td>B</td></tr></table>	B		おどおどと
A									
B									

問二、

a

と

e

にあてはまるものを次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、ほんとほんとほんと、嘘うそじゃないって

イ、なにが？

ウ、ほんと？

エ、あの……俺おれも……そうなの

オ、十二月十九日……って、俺も誕生日

問三、——線部①とありますが、少年はもともとどう思っていましたか。それがわかる一文を文中からぬき出し、初めの五字で答えなさい。

問四、——線部②とありますが、この時の少年の気持ちを四十五字以内で説明しなさい。

問五、——線部③と対照的な女の子の気持ちを読み取れる行動を文中から三十六字でぬき出し、初めと終わりの五字で答えなさい。

問六、——線部④とありますが、その理由として最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、本当はタナベさんを好きなのに、今日初めて出会った女の子をデートにさそおうと意気込んでいる自分が恥ずかしかったから。

イ、同じクラスのタナベさんに思いを寄せているはずなのに、他の女の子が気になってしまう自分が恥ずかしく思えたから。

ウ、片思いをしている同じクラスのタナベさんのほかに、すてきな女の子に出会えたことがうれしくてしかたがないから。

エ、片思いのはずなのに、まるで両思いになっているかのような気分になってしまった自分が恥ずかしい存在に思えたから。

オ、気になり始めた女の子の隣でプラネタリウムを見られただけでなく、思いがけず肘に触れることができうれしかったから。

問七、——線部⑤はどのようなことを表していると考えられますか。その説明として最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、夏の空に比べて冬の空は星がよく見えるということ。
- イ、女の子に必ずもう一度会おうと決心したということ。
- ウ、少年と女の子の心の距離が近づかなかったということ。
- エ、子どもたちに興味を持つことが見つかったということ。
- オ、空や星への興味が少年からなくなったということ。

問八、次のア～カのうち、本文の内容と合っているものを全て選び、記号で答えなさい。

- ア、少年は星座盤の使い方や学校で学んでから観察会に参加した。
- イ、少年は夏と冬の夜空の違いがあることに感心した。
- ウ、少年はプラネタリウムのナレーションがわかりやすいと思った。
- エ、女の子はタナベさんよりも高くて優しい声をしていた。
- オ、女の子は星座盤のあつかい方に慣れていてとても上手だった。
- カ、女の子は楽しみにしていたプラネタリウムを夢中で見ていた。

問九、あなたがこれまで出会った人やものの中で、特に印象に残っているものは何ですか。その理由とそこから学んだこともあわせて書きなさい。

《二》 次の1～5の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1、コウゴウ陛下。
- 2、友達を家にマネく。
- 3、ケンアクなふんいきになる。
- 4、薬がキいた。
- 5、ザツコク米を食べる。

《三》 次の1～5の——線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- 1、おじの安否を気づかう。
- 2、食事を済ませる。
- 3、マラソンのタイムが縮まる。
- 4、山頂に至る。
- 5、組閣の発表がある。

《四》 次の1～4の言葉を逆さに読んだ時にできる言葉を例にならって漢字で書きなさい。

(例) 寒気 かんき ↓ 答え 「金貨」

- | | | | |
|------|---|---|---|
| 1、軍部 | ↓ | 「 | 」 |
| 2、漢詩 | ↓ | 「 | 」 |
| 3、文化 | ↓ | 「 | 」 |
| 4、落差 | ↓ | 「 | 」 |

《五》 次の文章の①～⑧にあてはまる言葉を後の語群からそれぞれ選び、意味が通るようにしなさい。ただし、同じものは二度使えません。

雪①降って、街②白くそまった。窓③開ける④遠く⑤山⑥見えた。この風景⑦街のP R⑧ふさわしい。

語群

を・ば・に・と・が・へ・の・や・は・ので・こそ・さえ・まで・から

《六》 次の 1、2、3 の中には、数える単位の異なるものがそれぞれ一つあります。その異なるものを選び、単位も答えなさい。

- | | | | | | |
|----|------|-----|-----|-----|-----|
| 1、 | りす | とんぼ | かえる | ねこ | すずめ |
| 2、 | えんぴつ | つえ | とびら | かさ | ほうき |
| 3、 | 飛行機 | テレビ | ピアノ | 自動車 | 冷蔵庫 |

						問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一		
1	5	1	1	1	1								a			
															b	
	6	2													c	
単位			2	2	2										d	
															e	
2	7	3										5				
			3	3	3											
	8	4														
単位																
			4	4	4											
3																
単位				5	5											

受験番号			

氏名